

モンゴメリー著・村岡花子訳「赤毛のアン—赤毛のアン・シリーズ1—」新潮文庫、新潮社 2008年2月25日刊を読む

1. 「でもあんたには夢ゆめがあったじゃないか——それに——」

「いままでどおり夢はあるわ。ただ夢のあり方が変わったのよ。いい先生になろうと思っているの——そしてマリアの視力を守っていくのよ。それに家で勉強は続けて、独学で大学の課程を取ってみようと思っているの。ああ、いろいろなことを計画しているのよ、マリラ。この1週間ずっと考えていたの。ここで精一杯やってみるつもりよ。そうすればきっと最高のものが返ってくるはずよ。あたしがクイーンを出てくるときには、自分の未来はまっすぐにのびた道のように思えたのよ。いつもさきまで、ずっと見とおせる気がしたの。ところがいま曲り角にきたのよ。曲り角をまがったさきになががあるのかは、わからないの。でも、きっといちばんよいものにちがいないと思うの。それにはまた、そのすてきによいところがあると思うわ。その道がどんなふうのびているかわからないけれど、どんな光と影おかげがあるのか——どんな景色がひろがっているのか——どんな新しい美しさや曲り角や、丘や谷が、そのさきにあるのかはわからないの。」

P516

2. 「あんたとギルバートが、門のところで30分も立話をするような仲よしだとは思わなかったがね」とマリラはひやかすようにほほえんだ。

「いままではそうだったけど——あたしたち、いままでは敵同士だったよ。でもこれからは、よい友達同士になったほうがいいって2人とも気がついたの。ほんとうに30分も立ってからかしら？ほんの5分ぐらいにしか思えなかったけれど。でも5年間のうめあわせをしなくちゃならないんですもの、マリラ」

アンはその夜、満足することの幸福をしみじみ味わった。桜の枝を風が静かにわたり、ハッカの香がただよってきた。星は窪地くぼちの樅の上でまたたき、木の間からダイアナの窓の灯ひかがやが輝いていた。

アンの地平線はクイーンから帰ってきた夜を境としてせばめられた。しかし道がせばめられたとはいえ、アンは静かな幸福の花が、その道にずっと咲きみだれていることを知っていたしんけん。真剣な仕事と、りっぱな抱負ほうふと、厚い友情はアンのものだった。何ものもアンが生まれつきもっている空想と、夢の国を奪うばうことはできないのだった。そして、道にはつねに曲り角があるのだ。

「神は天にあり、世はすべてよし」とアンはそっとささやいた。

P524

[コメント]

名作、「赤毛のアン」全11巻シリーズの第一巻目の最終章。是非御一読を。

— 2015年4月23日 林 明夫記 —